宇野

永田将: 直

|人君 哉 君

作曲 作歌

家家の街に散るほどいえいえ 六華ぞ窓に刻まれる りっか まど きざ 灯灯ともされて

迷走の士と初なる乙女 まみえんとすは

鈍き銀なる空の下にぶぎがん。そらした

一会の愛の光芒といちえ 時効なき戦争裂かれたる

新興の今何かを思う 時代に澱の沈むを見つつ

岸に萌えただよい 世にふる柳の薄緑

しだれて音もなく

かき片隅求むる若人等たかだすみもと

月日に添えてうち紛れず 露けき草にさし入るも 別るる道を限りとて

友の一言軽からずともいちざんかる 思い乱るる面影に添う
おもかげ
そ 肝胆相照らしき

折しも巌の潤い映えて
なり
いわお
うるお
は 登りて伝う水の城のぼったのはののばったのがあるがのが 白き岩肌かいなとり

魂。まで飛沫せよ 光の花の冠受くを見ゆ たどりこし我等が この灼熱よこの碧水よ

Ŧi.

さらば我らが土中の碧の 安らぎ満ちて夜の声やす 残照長く尾を引けば

新たな一歩しるしつつ その重みこそ出会いし歓喜 華かなる憧れを

忘るまじ清き